

## 瀬戸内海の海域“沖積層”の音波探査記録と堆積シーケンス

## Acoustic record and sequence of the late Pleistocene to Holocene marine sediment in the Seto Inland Sea

# 井内 美郎 [1]; 井上 卓彦 [2]; 岩本 直哉 [3]; 天野 敦子 [4]; 塩屋 藤彦 [5]

# Yoshio Inouchi[1]; takahiko inoue[2]; Naoya Iwamoto[3]; Atsuko Amano[4]; Fujihiko Shioya[5]

[1] 愛大・沿岸環境センター; [2] 愛大・理工・環境; [3] 愛大・理工・環境; [4] 愛大・理工; [5] 愛大・理工・環境

[1] CMES, Ehime Univ.; [2] Graduate School of Sci. and Eng., Ehime Univ.; [3] Earth Sci., Ehime Univ.; [4] Earth Sci., Ehime Univ.; [5] Environ. Sci., Ehime Univ

シーケンス層序学が我が国に導入されて以来、日本各地の様々な時代の地層についての見直しが進んでいる。一方、沖積層に関するシーケンス層序学的検討はまだ始まったばかりである。

発表者らは、瀬戸内海においてこれまでに得ている音波探査記録や新たに調査して得られた記録をもとに海域“沖積層”の検討を進めている。今回報告するのは瀬戸内海東部の大阪湾のユニブーム記録と吉川ほか(2005)に示された大阪湾におけるボーリング結果との対応、および伊予灘東部松山市沖で得られたユニブーム記録の解析結果である。

#### 1. 大阪湾

大阪湾におけるユニブーム音波探査記録とその解釈については、すでに述べた(井内ほか:2004)。今回は大阪湾奥で採取されたボーリング資料の記載との対応を検討する。吉川ほか(2005)は、淀川河口沖でボーリング調査を実施し、堆積物の記載および様々な測定結果を示している。そして堆積物を堆積相から Unit 1a から Unit 3b までの6つに区分した。Unit 1 は河川から後背湿地、Unit 2 はエスチュアリー、Unit 3 は内湾泥底の堆積物である。ボーリング地点の近傍を通るユニブーム音波探査記録では、“沖積層”基底礫層と考えられる顕著な反射面、バックステップを示す海進期堆積体、前進堆積・クリノフォームを示す高海水準期堆積体が識別されている。相互の対応関係から、海進期堆積体はエスチュアリー環境での堆積物に、高海水準期堆積体は内湾泥底の堆積物に対比されることが明らかになった。高海水準期堆積体の下底付近には鬼界アカホヤ火山灰層が挟在し、その下位には貝殻濃集層準がある。このことから最大海氾濫面はこの貝殻濃集層準付近になると考えられる。なお、大阪湾の記録で確認された堆積域のシフト(バックステップ)が見られる深度は、48,46,44,38m である。

#### 2. 伊予灘東部

松山市沖におけるユニブーム音波探査記録の概要についてはすでに発表した(井内ほか:2005)。松山市沖の記録でもバックステップを示す堆積体が識別され、その深度は、46.5,44,40.5m と大阪湾で見られた深度5つの内の3つと良い対応関係を示した。

#### まとめ

以上のことから、1. 瀬戸内海東部の海域と西部に近い海域で海進期堆積体がほぼ同時期に形成されていることが明らかになった。2. 大阪湾では、海進期堆積体はエスチュアリー環境、高海水準期堆積体は内湾泥底環境で堆積したことが明らかになり、最大海氾濫面の形成は鬼界アカホヤテフラの年代より若干古いことが示された。